

学者 佐佐木茂美先生

井上英明

時として世間には文学芸術の分野に身を置きながら、どこそこ大学教授とか、何々博士とか、肩書きを付けなければ通用しないと思ひ込んでゐる先生方がいる。自分は何者であるかよりも、他人に何と思われたいかを始終気にしないではいられないタイプの人である。昔の日本人はこうした御仁を俗物と蔑称したものである。

佐佐木茂美先生は早稲田大学大学院（フランス文学）在学中に、仏国政府給費留學生試験に合格され、一路パリ大学（ソルボンヌ）に学ばれた。彼の地にあつて学業は大いにすすみシャルル・ドルレアンに関するフランス語で書かれた論文で文学博士、帰国後は招かれて明星大学教授となられ、永らく本学の学問的水準の高さを内外に見せつける論著をつぎつぎと刊行されてきた。今や先生は、わが国の中世フランス文学研究を代表する碩学であるのみならず、斯学の総本山ソルボンヌを中心に、欧州全土にわたるアカデミズムにおいてその学識の深さを知らぬ者はない。にもかかわらず先生は国の内外を問わず、学会では何処に出かけら

れても、プロフェッスールとかドクトル・エス・レットルなどの称号を冠せず、マダム・ササキだけで通用する稀有の存在となつてゐる。先生が男性なら、わたしは「学問の鬼」と申し上げたいのだが、いつもお静かな音容の女性でいられるので、フランス語で *maitresse femme* とお呼び申し上げたい。

佐佐木先生は永年にわたる本学在任中にも、夏はほとんどフランスで過ごされ、その間たくさん論文を書かれ、わたしの書架を飾る大著だけでもマダム・ササキ・コーナーが出来るほどである。その学問的研鑽と努力は後学の模範であり、まことに景仰に値いするものでなければならぬ。

近時、政府は日本の国公立大学の学部学科の設置に対して教授陣もカリキュラムも「届け出制」とし、ほとんどん許可し、事務上の手続きの煩瑣を省くかわりに、設置認可後は自己点検や自己評価を義務づけてゐる。一部の大学はそれを第三者評価にまかせつつあり、いきおい研究教育業績の自立的展開をはばむように危惧されるのであるが、わが日本文化学部設立の頃は官の審査がやたらときびしく、わたしは何十回となくいささか気の重い霞ヶ関なる場所に足を運ばなければならなかった。新しい学部学科にはそこに配置される全教科に責任を持つことのできる、いわゆるマル号教授の就任を必要とする。佐佐木先生は日・仏比較文学のマル号教授のお一人としてそのご就任を望まれた方である。

佐佐木茂美先生のこれまでの赫々たる研究業績はおそらく本誌の頁に一段と光彩をそえるであろうから、定年制により、今年三月末日を以つてご退職になられる先生に、わたしはいささか惜別の情をこめて個人的な回想の端々を申し述べておきたい。

先生の学問的環境は早稲田とソルボンヌである。先生が早稲田の仏文

を選ばれたのはおそらく当時の早稲田にはわが国の中世フランス文学の権威佐藤輝夫先生がおられたからであろう。佐藤先生の特にヴィヨンの名訳などは東大の鈴木信太郎訳と双璧をなすものであり、わたしなどでさえ、すでに高校生の頃からその数節を暗誦したものである。佐佐木先生のこの恩師に対する私淑ぶり、また一途に学問に精進して止まない、佐藤先生のこの愛弟子への愛情は父親と実の娘かと思われるほどで、はた目にも羨ましいかぎりであった。

昭和四十一年（一九六六）の秋だっただろうか。わたしは母校の恩師故辻村敏樹教授（国語学）から電話があった。近日中に佐藤輝夫教授をおたずねしなさいとのこと。佐藤先生は文学部長の任期を終えられ、当時は大学院文学研究科長であり、文学部に比較文学研究室をおつくりになったところであった。わたしは大学院文学研究科で国文学を専攻する博士課程の学生で、フランス文学のあの佐藤先生から呼び出しを受けるとは何事か、戦々兢兢々の思いで研究室をおたずねしたところ、先生は開口一番、君は国文学専攻の院生で英語を能くする（先生のお言葉のまま）と聞いて居る。今、ニュージージーランドの国立オークランド大学というところが、アジア文学部に日本文学科を創設するというところで、その初代教官の公募が本学に来て居る。辻村教授に話したところ、イノウエ君が最適だということである。ついては君に応募する意志があるのなら、わたしが推薦状を書こう、とおっしゃったのである。わたしはその後国の内外、三十数名の応募者の中から選ばれてかの地に赴任することになったのが、その時初めて佐佐木茂美というお名前を知ったのである。先生はこれから比較文学（先生の発音はヒクククブングククである）をやる者は外国（これ又グワイコクである）で認知される仕事をやるべきである。今、ソルボンヌでシャルル・ドルレアンについて博士論文を書

いている佐佐木茂美君というすぐ出来る女性がいる、とおっしゃって、いかにも誇らしげだったその時の先生の温顔が今でも記憶にあざやかである。その後オークランド大学で任期を終えてわたしは英京ロンドン大学に赴任することになるが、茂美先生とはながらく対顔の機を得ないままに歳月は流れた。

二回目に佐佐木先生のお名前が出たのはやはり佐藤輝夫先生のお口からである。自分は早稲田を定年で辞めてから、児玉三夫先生の招きで明星大学で教えているが、もう歳だ、辞めさせてもらおうことにした、ついでにはあとを君にやってほしい、明星にはソルボンヌの文学博士佐佐木茂美君がいる、他にも優秀な先生が揃っていらっしゃるから来い、というご下命であった。

三回目は前理事長・学長故児玉三夫先生の強い希望で青梅キャンパスに新しく日本文化学部設置が決定した時である。わたしはただちに佐藤先生の居宅を訪れ、ご指導を仰ぐことにした。旧来の国文学と外国文学とを合体させた「比較文化学」をつくらせていただきたいと申上げると、先生は名古屋に小沢正夫という、日本古典文学の専門家でフランス語の出来る学者がおられる。何なら紹介しようか、とおっしゃって下さった。その時のわたしの心中には『平家物語とローランの歌』という大著のある佐藤先生を措いてほかに相談相手など一人もいなかった。小沢先生も結構ですが、先生はどのような構想をお持ちでしょうか、とお伺いすると、返って来たお言葉は君の好きなようにおやりなさい。あとで児玉三夫先生にも話しておくということであった。その時、三たび佐佐木茂美先生のお名前が先生のお口から出たのである。佐佐木君をメンバーに加えるとい、あの人は明星の宝物です……わたしはこの佐藤先生のお言葉をそのまま茂美先生にお伝えした筈である。

佐佐木茂美先生は学問のエリート中のエリートであり、日本文化学部言語文化学科に着任されてからも、わたしはフランス語の不確かな部分があつて質問するたびに、先生はその場で教えて下さった。ある古歌のフランス語訳の解釈に難渋したときにも、先生に問うと、その場で美しい日本語訳を示された。

わたしが長らく教壇に立ったオークランド大学やロンドン大学で、定年退職の先生には、

Many congratulations on your happy retirement!

と、口々に言つて握手することになっている。

教壇を退かれることはそれだけご研究の自由な時間が増えることである。本物の学者にとっての定年制は慶賀すべきことなのである。先生の益々のご加餐を祈つてやまない。